

# に「に」通信

第一〇七号 平成十六年 二月 二十日

〒九三三〇八〇 高岡市問屋町四十

有限会社 沖商店発

代表取締役 沖昌弘

TEL 〇七六六一五五〇

FAX 〇七六六一五五〇〇

E-mail [okishoten@open.ocn.ne.jp](mailto:okishoten@open.ocn.ne.jp)

いつもお世話になりありがとうございます。

『人は何の為にこの世の中へ生まれて来たのでしょうか』『人生の本来の目的は何なのでしょう』『そんな人生の根本問題を皆様と一緒に考えたい』と思ひ、皆様の心に一石を投じて、意見を頂く機会になることを願って本通信をお届けしている次第です。どうか忌憚りの無いご意見をお寄せくださいますようお願い申し上げます。

## 一 忘れる

私は、今は亡くなった母親から「あなたは物忘れの神様やね」と言われていました。中学一年生の時に受けた、知能テストの記憶力の部では一〇〇点満点でした。でも、そう言われれば小学生の時には、いつも忘れ物を家にとりに帰っていたような気がします。

こんなことは自慢することではないと思いますが、私は若い時からよく物忘れします。以下例をあげます。

一、家でも会社でも、何かを取りに（するために）その場へ行きますが、途中で他の事を考えたりすると、その場に置いて、自分は何をするためここへ来たか、と思うことが度々ありました（今でも）。思い出そうとすればするほど思い出せません。仕方がないので元の位置に戻って、同じ姿勢になつて、先刻何を考えていたか思い起こします。（その場合は、ほとんど思い出すことができます）。

二、何かの目的で、車で飛び出して、途中で他の事をいろいろ考えたりすると、「あれ、わし今どこへ行くのだったっけ」

三、よく似た話ですが、何かのことについて話をしている、関連した例え話に入り、それを余り詳しく話しているうちに深入りし過ぎて、「あれ、わし今何について話していたっけ」。本題に戻れず困ることがあります（こんな時は、素直に相手に聞くのが一番）。

こんな私ですので、仕事の上でもお付き合いの上でも、約束はなるべくしないようにしています。どうしても約束しなければならぬ場合は、手帳に書き、事前にもう一度念を押してくれるよう、相手に

お願いしておきます。それでも、手帳を見るのを忘れ、すつぽかす場合が良くあります。また会社において「このことは明日の朝礼で、皆に連絡しよう」と思うことも、周りの人にお願ひして明日の朝もう一度促してもらうようにしています。

ある事柄に対する判断・決断や企画・発案にはある程度自信はありますが、物事を覚えておくと言うことについてはまったく自信がありません。

母親が「あなたは物忘れの神様やね」と言うのは、よく忘れる→その程度が激しく名人級である→名人のまだ上、神の域にまで達している→「物忘れの神様」ということであまり有難くない言い様なのです。そういえば「あなたシユラハントクけ」とも言われていました。（シユラハントク＝周利槃陀伽（シユリーハンダーカー）＝お釈迦様の弟子で物忘れの激しい人でしたが、努力の末、遂に阿羅漢となる）

しかし、『忘れる』と言うこともひとつだけ良い事があります。厭な事を『忘れる』と言うことです。私は、樂觀主義者です。あまりよくよくよしません。何事に関しても「仕方がない」と諦めることができる能力が、他人より優れていると思います。

「相手を刺し殺してやるるか」「爆薬でも仕掛けて吹っ飛ばしてやるるか」と思うほど、頭にくる目に合わされても、少し時間が経つと、「これも神の試練」と考え直すことができます。さらに年月を経るとすつかり忘れてしまいます。この点は甘いと思います。今日、世界各地で戦争や自然災害を忘れないように、記念行事が行われています。

一・一七の阪神大震災、八・五広島、八・八長崎への原爆投下、九・一一米国の同時多発テロなど。私は、記念行事を行うことに反対はしませんが、過ぎ去ったことにいつまでも執着するのは嫌いです。毎年「戦争反対」「世界平和」を掲げ式典なども行われていますが、私には形骸化した主催者側の「独りよがり」に思われてなりません。

そんな儀式は簡素にして、もっと実践的な活動、例えば防火訓練・避難訓練・救助訓練などを頻繁に行い、万が一に備える方がよほど有効だと思います。せつかく忘れかけた悲しみや怒りを、ことさら思い起こす様なことを、する必要はないと思います。所詮、人間に欲ある限り戦争はなくなりません。ましてや、自然災害は人力では止め様がありません。それを人間の力で（人工的に）阻止しようと思っるのは人間の驕慢というものです。

私は置かれた環境は、神が与えた試練と受け取り自分がその状況下で、如何に考え・如何に行動するかと言うことが大切なことだと思っっています。

## 二 天罰

BSE（牛海綿状脳症）＝狂牛病。鳥インフルエンザ。そしてそれが形・質を変え豚に伝染した豚インフルエンザ。（豚インフルエンザは鳥インフルエンザより、人に伝染し易いウイルスだといわれています）。また、ハクビシンから伝染したと言われているSARS（新型肺炎）。これ等は、発病の原因や伝染のメカニズムが、まだはつきり分ってはいません。

でも、原因の無い結果はありません。これ等の現象にも必ず何らかの原因があるはずで。

しかもそれは、人間の驕慢に所以するものだと、私は思います。

狂牛病は、牛の肉骨粉を牛に食べさせるといふ共食いの行為の結果、蛋白質が突然変異して牛の脳をスポンジ状に変える病気だそうです。それは自然界で人間が介入しなければ起き得るはずのない病気です。狂牛病の流行により大量の牛が、それこそ罪も無いのに殺され処分されました。しかも狂牛病に罹っているかいかはつきりしないのに。

そしてそのために日本の牛丼屋が、牛丼の販売を諦めざるを得なくなるまでになりました。そしてその代わりとして鶏肉を用いようとしたやさき、今度は鳥インフルエンザの流行で、これまた罪の無い鶏が何千万羽も殺されました。そしてそれが今度さらには、豚にまで及ぼうとしていると報道されています。

私は、この一連の事件は、只の偶然ではなく、目に見えない力（神＝仏＝天の力）が働いているような気がしてなりません。人間のエゴと驕慢に、神仏が警告を発し、天が罰を与えたのだと考えます。もう少し、生き物の命という事に想いをやり、動物の命の尊さを考えよと。

中国ではゲテモノではないのかもしれないかもしれませんが、SARS（新型肺炎）にしてもハクビシンなどと言うゲテモノを食べるから罹るのです。人間は、動物だけでなく植物も含め、他の生命を犠牲にしないでは生きて行けません。自己の生命維持のために、その身・その命を提供して呉れる者たちへの、感謝と慈しみの念を忘れてはならないと思います。

## 三 大きな倒産と小さな倒産

二月十七日の新聞の第一面記事は、どの新聞もカネボウの経営再建の方法が、花王への化粧品事業売却から、一転して産業再生機構に支援を仰ぐ計画に方針換えしたニュースでした。

花王との間では「十二日未明には売却条件についてほぼ話し合いがつき、双方の交渉チームが握手して別れている。ここまで進めてきた交渉が誠実であったかについては疑念がある」と花王の後藤卓也社長が不快感を示している通り、カネボウの帆足隆社長を始めとする経営陣の決断と段取りの悪さが際立っています。こんな社長の経営する会社は、永いことありません。産業再生機構はこんな会社を支援してはいけません。

産業再生機構とは「不良債権処理を加速し、金融と産業の一体的な再生を図ることを目指して官民で設立した株式会社。経営不振企業を支援するか否かは、再生機構内に設置された産業再生委員会が、再建計画の妥当性などをもとに判断する。昨年五月から業務を開始。来年春までに債権を買い取り、設立から五年後の二〇〇八年春をめどに解散することになる。それまでに再建にめどをつけ、スポンサー企業などに保有債権を売却する」となっています。

これは自主自立の精神溢れる企業が、たまたま不慮の事故で経営不振に陥った場合には有効ですが、今回のカネボウには当てはまりません。

カネボウ化粧品事業を四千億円で花王へ売却したらカネボウは必ず再建されると思います。花王への売却を撤回した理由を「最大限の努力をしてきたが組合、株主、取引先などの意見を聞きどうしてもうまくいかないという状況になった」と帆足社長は言っています。「組合、株主、取引先など」とは、あくまでカネボウだけの組織内のこと、それを公共の産業再生機構に頼るとは、もはや一人前の経済人とはいえません。自分の失態を国にかつけるなら、自分はずいぶん全権を委ねるべきでしょう。

産業再生機構は、国の指導による、いわゆる「親方日の丸」的性格がありますから責任の所在は定かにならず、結局は税金で能力の無い者の尻拭いをする事になるのです。「国は、大きい倒産は救うが、小さい倒産は見捨てる」というのでは、報酬ゼロで頑張っている私はやり切れません。

有限会社 沖商店 代表取締役 沖昌弘

個人メール E-mail [Okishoten@open.ocn.ne.jp](mailto:Okishoten@open.ocn.ne.jp)  
（お問い合わせの際は個人メール宛に連絡をお願いします）